

新年明けましておめでとうございます。

職員の皆様方におかれましては、令和8年という輝かしい年をご家族揃って ご健壮にてお迎えになられたことと心からお慶び申し上げます。

昨年は、それぞれの職務において町政進展、また住民福祉の増進の上にお力添えをいただきありがとうございました。

さて、昨年を振り返ると、三芳町にとって大きな節目の年でした。三芳町が昭和45年に町制施行されて55周年、東京2025デフリンピック大会が開催されマレーシアのホストタウン、オーストラリア・クイーンズランド州教育省との教育に関する協定締結、韓国河東郡との友好都市協定締結、ローマにて世界農業遺産認定証授与式、ユニセフ子どもにやさしいまちづくり会議のスタート、そして戦後80年の年もあり、大阪・関西万博も開催されました。

怒濤のごとき1年が過ぎ去り、静かに昨年を顧みると、これまで取り組んできた様々な施策が結果として実を結び、成果を上げることができた年でした。

まさに、昨年は大きな節目となった年でした。

「節から芽を出す」という言葉があるように、未来のまちづくり

の指針となるような芽が多く出始めました。

その中から今年の3つの指針についてお話をしたいと思います。

最初に「Go together～共に進む～」、二つ目が「一人ひとりの誇り（プライド）を尊重する共生社会へ」、三つ目が「One voice に耳を傾けて」です。

最初に「Go together～共に進む～」ですが、

昨年10月31日、イタリアローマの国連食糧農業機関（FAO）本部にて世界農業遺産（以下 GIAHS）認定証授与式が行われました。この式典で14の国28の地域が新たに認定され、認定地域は、100を超える102となりました。

FAO 本部は、古代ローマ時代の重要な都市空間が密集する地域にあります。

映画「ベン・ハー」の舞台となった古代競技場チルコ・マッシモ、カラカラ浴場、パラティーノの丘、そしてコロッセオなどが一望できる場所にあります。

本部の屋上に立ち、古代ローマ遺跡の中を吹き抜ける風になびくFAO 旗のもとで、遺跡群を見ていると360年前に武蔵野地域を開拓し、今日まで伝統的農法を継承してきた先人達の姿が目に浮か

んできました。これまで継承、保全してこられた農家や関係者の皆さまへの感謝の念と、世界で当地域が評価されたことの喜びで胸が熱くなってきました。

そして、前日、10月30日、三芳町は韓国河東郡とFAO本部にて友好都市協定の締結式を行いました。認定地域同士の友好都市協定は、実績がなくFAO内でも高い関心を集めています。

締結式ではお互いのシステム等をプレゼンし、友好を深めました。韓国河東郡の担当者は、プレゼン最後に次の言葉で締めくくりました。

“If you want to go fast, go alone.

If you want to go far, go together.”

「早く生きたいなら、一人で行け。

遠くへ行きたいなら、共に行け。」

この言葉は、FAOの思想を表す時によく使われますが、続けて

“We hope to work together sustainable development
and to continue for a long time.”

「私たちは持続可能な開発に向けて共に取り組み、長く続いていることを願っています。」

河東郡の皆さんから熱く真剣な思いを感じました。

FAO は、飢餓の撲滅、持続可能な農業推進にあたり、様々な課題を解決する上で、ネットワークの構築を重要視しています。

その基本となる考えが「go together～共に進む～」です。

韓国河東郡と三芳町の友好都市協定は、FAO の進めるネットワーク構築の先進的な一事例であり、「共に進む」ことにより単独では解決できない課題を解決し、持続可能な未来を築くことができます。

この「go together～共に進む～」は、世界農業遺産の推進に止まらず、これまで三芳町が進めてきた協働のまちづくり、共創のまちづくりの基本となる考え方です。持続可能な社会の実現に向けて多くのパートナーとのネットワークを構築し、「go together～共に進む～」ことを大切にしていきたいと考えます。

次に、東京2025デフリンピック大会が開催され、三芳町はマレーシアのホストタウンとなりました。皆さんのご協力をいただき、金メダル1、銀メダル2、銅メダル1を獲得することができました。

4年前に東京で開催されたオリンピック・パラリンピックは、感染症の影響により、オランダ、マレーシアのホストタウンでしたが、交流や観戦事業を実施することはできませんでした。しかし、今回は選手の皆さんのが各小中学校を訪問しての交流会、観戦ツアーも行うことができ、子ども達の心に共生社会に向けてデフリンピックのレガシーを遺すことができたと思います。

国際ろう者スポーツ委員会のアダム・コーラ会長は、日本メディアに対して、次のように述べていました。

デフリンピックは、「障害を乗り越える物語ではなく、ろう者が自らの文化や言語をどう誇りに思い、スポーツの舞台で表現しているか。私たちには、手話という独自の言語がある。それは私たちの誇りであり、文化だ。アスリートの高いパフォーマンスの中の「デフ・プライド」が、デフリンピックの根幹にある理念だ。」と。

その言葉通り、開会式、閉会式では、演出の中に手話と組み合わせたパントマイムや歌舞伎、狂言、ダイナミックな光の活用など「デフ文化」が隅々まで発信されていました。また、「デフ・プライ

ド」と言われる矜持は、マレーシア選手団からも事前キャンプ、大会期間中を通して感じられました。

選手の皆さんには自信に満ち溢っていました。また、大会においても敗戦した選手が地団太を踏み、胸が引き裂かれんばかりに悔しさを露わにしている姿も見受けられましたが、それも「デフ・プライド」によるものだったのではないかということに気づかされました。

閉会式後、マレーシア・デフリンピック・スポーツ協会オン会長はじめ、役員の皆さんとささやかなお別れ会を行いました。会場を出た後、会長はじめ役員の皆さんがあえて私達に対峙し、一列に並び威儀を正し、感謝の言葉を述べられました。

その姿は、昨年紹介した『論語』の中の
「君子は人と交わるに恭しくして礼あらば四海の内皆兄弟なり。」
(人と交わるのにうやうやしくして礼にかなうようにすれば、

世界中の人は皆兄弟である)
を彷彿させるような礼儀にかなったものでした。その礼儀には
「デフ・プライド」から自然とにじみ出てくる自信と相手への敬意の気持が満ち溢っていました。

東京デフリンピックの大会ビジョンに
「“誰もが個性を活かし力を発揮できる” 共生社会の実現」が
あります。

人は、自身の“個性を活かし力を発揮できる”ところに、人とし
ての誇り（プライド）が生まれます。そして、お互いに相手の誇り
ある人格を尊重し合うところに共生社会が実現されるのです。

このことをマレーシアチームから教えていただきました。
一人ひとりの誇り（プライド）ある人格を尊重するまちづくりを
目指し、共生社会を推進していきたいと思います。

戦後80年、8月6日広島平和記念式典に6名の生徒代表と参加
しました。

記念式典では、平和への誓いを宣言した二人の子ども代表の言葉
が特に印象に残りました。

「One voice.
たとえ一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば、変化
をもたらすことができるはずです。

大人だけでなく、こどもである私たちも平和のために行動するこ

とができます。あの日の出来事を、ヒロシマの歴史を、二度と繰り返さないために、私たちが、被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声を紡ぎながら、平和を創り上げていきます。」

会場は静まり返り、その言葉に世界の平和を願わずにはいられませんでした。

三芳町は、子どもにやさしいまちづくりを進めています。子ども達の声に耳を傾け、子ども達の最善の利益を考え、施策を遂行する中で、子ども達が幸せになり、社会全体が幸せになることができます。

「ONE VOICE」に耳を傾ける。

それは、子ども達だけではなく、年齢、障がいの有無、性別にかかわらず、あらゆる人の小さな声に耳を傾け、紡ぐ先に、「誰一人取り残されない Well-being」の世界が開けてくるのだと思います。

少子高齢化、人口減少、教育や福祉、物価高、都市基盤整備や自然災害の激甚化など、自治体を取り巻く環境は厳しい。しかし、こうした時だからこそ、何よりも多くの人の「ONE VOICE」に耳を傾けていくことが重要だと考えます。

以上、今年の3つのまちづくりの方針について述べさせていただきました。

ここ数年間、山頂を目指して一歩一歩峻厳な山道を登り詰めてきました。

新型コロナウイルス感染症との戦い、コロナ禍での東京2020オリンピック、パラリンピック大会、そして、その完結編ともいえる東京デフリンピック大会。10年越しのチャレンジによる世界農業遺産の認定証授与式、関越自動車道三芳PAスマートICのフルインター化、これは20年かかりました。また、みよし野里山探訪ガーデンツーリズムの認定、フォレストシティ構想、教育政策ムープランの策定、Well-being のまちづくり宣言、共創のまちづくりのスタート、ユニセフ子どもにやさしいまちづくり候補自治体認定等・・・。

一つの山の頂が目の前に見え始めた瞬間、その先に峠々たる山脈が連なっている光景が目に入りました。

様々な事業が動き出し、新たなステージに入ったのです。

「～集い・学び・育つ～輝く未来創造拠点」が、いよいよ9月に

供用開始となります。愛称も「ルミナ」と決まり、三芳町がさらに輝き発展していくことが期待されます。

また、地域活性化発信交流拠点「道の駅」もアドバイザリー業務委託により、業者選定のステージに入っていきます。世界農業遺産など地域資源の地域ブランドが地域を活性化するとともに、世界ブランドへと飛躍する可能性も秘めています。

さらに、ユニセフ子どもにやさしいまちづくりの推進により、子どもの幸せが社会全体を幸せにしてくれます。

新しい1年がスタートします。

まずは、職員の皆さんには、三芳町が新たなまちづくりのステージに入ったことを認識いただき、上記の3つのまちづくりの指針「Go together～共に進む～」、「一人ひとりの誇りを認め合う共生社会へ」、「One voice に耳を傾けて」を念頭に様々な課題や困難を克服し、住民の皆さまの Well-being の実現の上に、それぞれの使命を果たしていただきたいと思います。

これから寒さも一段と厳しくなります。健康管理には十分ご留意いただき、職員とご家族が共に健康で、充実した一年を過ごされることを心から願いまして年頭のあいさつといたします。